

[海外研究調査報告]

タイ仏教寺院の布薩堂について
——タイ国王室第一級寺院 Wat Pho⁽¹⁾の布薩堂——

田 辺 和 子

The Uposatha Hall in the Temple of Thai Buddhism:
A Study Report on the Uposatha Hall of Wat Pho,
the First Ranking Royal Temple

Tanabe, Kazuko

The Uposatha hall is located at the center of the temple precincts of Theravāda Buddhism. Upasampadā, Pātimokkha reciting ceremony and other most important rites for monks are held there. In this report I would like to present my views on what the Uposatha hall is, through the investigation of the Uposatha hall in Wat Pho. The Chakri dynasty or the Bangkok dynasty became the sponsor of this temple from the days of King Rama I. So the Uposatha hall of Wat Pho was built with the clear intention of Chakri dynasty which may be thought out with the research to follow.

King Rama I donated the art works of the epic of the Ramakian, Rāmāyana in Thailand to Wat Pho. Because it is related to the Ramakian that Good defeats Evil in the end of the battle and the story of it honors the king, in which the king compares himself to the God Viṣṇu, who comes to earth in the story as the good king Rama. King Rama I may have wished by virtue of his position as the king to be the reincarnation of God Viṣṇu, coming to earth to solve all the world's troubles.

King Rama I brought many Buddha images from the temples destroyed by the war in cities in the northern part of Thailand and then housed in the halls or the cloisters in the site of the Uposatha hall of Wat Pho. The Lopburi style stūpas at the four corners of the site of the Uposatha hall and the five pagodas

behind the cloisters at each corner are built in the reign of King Rama I in which the relics of Shakyamuni Buddha have been enshrined.

As for the mural paintings in the Uposatha hall of Wat Pho, King Rama III started to draw them and King Rama IV has completed them. The lives of disciples of the Buddha are depicted in the 29 bays between doors, or between windows and doors there, though the biographical stories and the fixed ten past stories of the Buddha surely appeared on the Uposatha hall in the days of the late Ayutthaya and Tomburi. Here the biographical stories of the disciples are depicted vividly how they entered into the Buddha's saṅgha. Moreover the daily lives of the lay people are shown clearly. Foreigners on the mural appear friendly. The several scenes of the paintings of no one but Ummaggaḥāṭaka telling on Bodhisatta Mahosadha as the Jataka stories, are shown on the upper bays of windows and doors. In his childhood he was very clever. After he grew up, he helped his king on many matters and he dug the tunnel in which he made the palace having automatic doors and so on. Through the story, I have felt the intention of King Rama IV who wanted to make Thai people know about the importance of the wisdom and the modern industrial civilization.

The Chakri dynasty wanted to make the people know the importance of Buddhism, Thai cultures, foreign cultures, European civilization and the existence of foreign people are shown in the mural painting of the Uposatha hall of Wat Pho.

キーワード：ウポーサタ、布薩堂、シーマー、寺院壁画、ワット・ポー寺院

はじめに

南方仏教の寺院の中心となる建物は、布薩堂 (Pāli: uposatha, Thai: uboso) である。タイでは、近年まで受戒式の日、布薩の日、重要な仏教行事の日、日曜日、祝日、朝と夕の勤行時等以外は施錠されていて参詣出来る時は決まっていたが、近頃は多くの寺院の布薩堂がいつも参詣自由となっているように見える。

[タイ布薩堂調査理由…Wat Phichaya Yatikaram (ワット・ピチャイヤー寺院) において]

2018年3月16日(金)、布薩日に、清水洋平、舟橋智哉両氏に同行してラ

マV世 (King Rama V, Phra Chulalongkorn, 1868-1910) 時に大谷大学所蔵タイ写本を大谷大学に齎した織田得能氏の出家寺院とされ、当時はタマユット派寺院であったマハーニカイ派ワット・ピチャイヤー寺院を訪問した⁽²⁾。この寺院のウポーサタ堂内には、幾人かの老若の在俗信者が、参詣に来て瞑想をしていた。午後2時半以後に在家の世話人がやってきて、これから大事な行事があるから外へ出るようにというのでお堂の外に出たが、瞑想していた信者達は遠くに行かずにウポーサタ堂のまわりに座っているので私も同様に何がはじまるのか知りたいと思ってそこに座っていた。次々と比丘達が集まってきた。ドアが一か所あいていたのでそこから堂内の様子を覗き見える状態であった。ひょっとしたら、比丘が守るべきパーティモッカ (波羅提木叉) と呼ばれる戒律箇条を読誦する布薩会が始まるのかと期待していると、一人の比丘が脇の比丘にむかって上衣を偏袒にして礼拝し合掌したまま、言葉をかけている様子を見た。これは、パーリ律に見られる、他の比丘の前で自己の罪過の懺悔を行っている様子ではないかと思い、在家で女性である私にとっては、タイ仏教の布薩会参加も、覗き見も許されないの、これは、千載一遇のチャンスだと思ってそこに座っていた。午後3時から波羅提木叉誦出が始まった。この間には、堂内を殆ど覗き見る事は不可能であったが、1時間誦出の終了後、今度は、先ほどの比丘達が、前とは逆に先ほど合掌礼拝を受けた比丘が、前に合掌礼拝した比丘に対して礼拝合掌している姿を見た。この日を機縁として、筆者が写本調査でご縁の深い、Wat Pho 寺院で布薩会を見せてもらい、さらに布薩堂の調査実施を思い立った。

[布薩日調査1…布薩日の Wat Pho 寺院の様子]

2018年9月9日(土) マハーニカイ派とタマユット派共通の布薩日の午前8時に Wat Pho 寺院僧坊在住のマライ長老 (元 Ven. Dr. Phra Maha Thiab Malai) であるが、僧階位が上がったので現在名 Ven. Phra Rajapariyattimuni) の庫裏への訪問許可を得た。そこでは Wat Suthat 寺院近くの小学校の先生数人と生徒30人位とが長老への資具 (生活必需品) の布施を行い、その後マライ長老から各々が寺配布の読経本を授けられ、法話を与えられていた。

同日午前10時頃、布薩堂で、Wat Pho 寺院内の沙弥達が、比丘達の指導の下で読経していた。午後3時から波羅提木叉誦出会があるというので、聴聞可能かどうかを尋ねると、Wat Pho 寺院は、窓もドアも締め切るので比丘以外は外からでも聴聞はできないとの事であったので断念し、午後1時から行われると聞いていた、タムユット派の本山 Wat Bovoranives vihara (ワットボヴォーン) 寺院布薩堂の外で聴聞させて頂く事にした。

[布薩日調査2…布薩会聴聞, Wat Bovoranives vihara 寺院に於いて]

2018年9月9日(土)午後1時、Wat Bovoranives vihara 寺院布薩堂では、雨が降り出し、雷が鳴っていた。信者達は、布薩堂正面の正位置に線香と花、ろうそくを立てて礼拝した後、読誦聴聞のために布薩堂前に設置された中庭のテントに座って待っていた。始まった頃、遅れた比丘がやってきて入れてもらおうと扉を叩くとしばらくして中から扉が開いて入ることができた。1時間誦出が続く内に、雨風と雷がひどくなり、嵐の中に何度も落雷が起こるような荒れた天候になった。テントの信者達はずぶぬれになりながら、静かに聴聞を続けている。少し雨が小降りになると、信者達は再び堂内のブツダ像に向かって礼拝を繰り返していた。さらに小降りになった頃、布薩堂の窓から布薩会の様子を特別に覗かせて頂いた。堂内では、Wat Bovoranives vihara 寺院内の比丘全員が揃って戒律箇条誦出をしているその姿を見ることができた。

本稿では、Wat Pho 寺院の全容と、布薩堂の様子を報告する。

1 マハーニカイ派 Wat Pho 寺院全容

1.1 Wat Pho 寺院と僧院 (写真1)⁽³⁾

Wat Pho 寺院は、大敷地で、寺院と僧院の2つの区域に分かれ、しかもチャオプラヤー河に沿って建てられている。河は Wat Pho 寺院の西方にあたる。河の向い側には、Wat Arun (暁の寺) の大塔が見え、近くの船着場から渡し船ですぐに渡ることができる。



写真1 ワット・ポー敷地俯瞰と建築物説明

1.2 寺院区域

寺院は布薩堂エリアと大塔であるマハーチェーディ（Maha Chedi）の2エリアに分かれている。

[布薩堂エリア]

布薩堂エリアの中心にラマI世（King Rama I, Phra Phutthayotfa Chulalok, 1782-1809）が建立した布薩堂（写真2）が配置されている。布薩堂の周りには、バイシーマー（Pāli: *sīmā*, Thai: *bai semā*）（写真3）と呼ばれる結界石の界標が8か所ある⁽⁴⁾。ラマIII世（King Rama III, Phra Nang Klao, 1824-51）時に *baddhasīmā* 儀礼が施行され、ラマIV世（King Rama IV, Phra Mongkut, 1851-68）時に第二の *baddhasīmā* 儀礼が施行されている。その為にここには2個のバイシーマーが設置されている⁽⁵⁾。



写真2 布薩堂 (ウポーサタ)



写真3 パイシーマー

また布薩堂の周りを二重の回廊（内回廊と外回廊）で囲み、その回廊は東南西北に配置されているウィハーン・ティ (Thai: Wihan Thid) という四つのお堂でつながれている。タイでウィハーンとは、寺院の中で仏像が安置されて比丘や信者の礼拝堂にも説教道場にも学びの道場にもなる建物である。必要に応じていくつも建造されている。ラマ I 世は、国の各地の荒廃した寺院から仏像を集めてこの寺院のお堂や回廊に安置した。ウィハーン・ティの四つの堂内にも、仏伝の有名な場面を示す仏像が安置されているが、国の各地から運ばれてきたものである。東ウィハーン・ティには降魔像と仏立像 (写真 4)、南ウィハーン・ティには、初転法輪仏像 (写真 5)⁽⁶⁾、西ウィハーン・ティには、龍下仏像、北のウィハーン・ティには、パーリレーヤカ (Pārileyaka) 仏像の順に安置されている。そこに、信者たちが自由に参詣できるようになっている。

建設当初から、これらのお堂の中には、大理石に彫られた韻文の碑文が存在していたという。又、窓とドアのはめ板に花で囲まれている異国人の姿が守衛の姿として描かれていたと伝えられている。現在は以前の異国人の守衛の姿が薄れて、代わりに中国風な守護神の姿が窓とドアに描かれている。また、建設当初には、堂内に壁画が描かれていたと言われる。西のお堂

の窓のパネルにも、異国人の姿が描かれていたと伝えられ、北のお堂には、天、人、地獄の三界を示す三界経 (traibhūmikathā) の壁画が描かれていたという⁽⁷⁾。また、ウィハーン・ティの内回廊の中には、10世紀から14世紀までに東北タイやタイ中部に造られたアンコール前期のロップリー (Rob Buri) スタイル、即ちロケットのような形で建造されているマハーストウーパが四塔建てられ、その中に仏舎利が納められている。ラマ I 世が先ず建立し、ラマ III 世が高くさせてマハーストウーパを現在のように完成したと伝えられる⁽⁸⁾。



写真4 仏立像



写真5 初転法輪仏像

さらにウィハーン・ティの外回廊の外側には、L字型のウィハーン・コートウ (Wihan Kod) と呼ばれるお堂が四隅にある。ウィハーン・コートウには、色々なジャータカが描かれていたという⁽⁹⁾。その四隅の内側に五つのパゴダが建てられている。このパゴダにも仏舎利が納められている。ラマ I 世時に建立されている。

布薩堂エリア内のいずれの建物にもサンスクリットの叙事詩 Rāmāyaṇa のタイ編成版ラーマキエン (Rāmākian) に関係するものが見られる。布薩堂の扉の外側のパネルの螺鈿模様、地上から一段上がった所の腰板に当たる部分で、お堂を一巡するように嵌められた大理石に彫られた浮彫り彫刻、ウィ

ハーン・ティの破風の下にガルーダに乗るヴィシュヌ神像のガラス嵌め込み木造彫刻、ウィハーン・コートウの破風のラーマキエンの‘Catch & Capture’シーンにあたる場面の木造彫刻等である。いずれもラマ I 世が自分自身の仏教への深い信仰と尊敬を示す証として王室寺院に寄進したものとされている⁽¹⁰⁾。

[マハーチェーディエリア]

マハーチェーディエリアには、現在、中央にラマ I 世、ラマ II 世 (King Rama II, Phra Phutthalocetra Naphalai, 1809-24)、ラマ III 世、ラマ IV 世等、四王の大塔マハーチェーディが聳えている。先ず、ラマ I 世は、布薩堂の西にマハーチェーディ I 塔を建立し、アユタヤーの寺院から運んできたプラ・シーサンペートウ (phra Si Sanpetch) 仏という仏像と仏舍利を手ずから安置した。その周りの壁にラーマキエンの壁画と大理石の碑文を残したが、後に壁を壊したという⁽¹¹⁾。ラマ II 世のマハーチェーディは、ラマ III 世によって父王のために建立され、ラマ III 世のマハーチェーディとラマ IV 世のマハーチェーディについては、仏への寄進として王自らが建立した。

その西側に聖典所蔵庫のモンドップ (Pāli: maṇḍapa, Thai: mondop) があり、中には、壁画としてはラーマキエンの物語が描かれ、貝葉写本等と仏足石が安置されている。最初にラマ I 世は、モンドップの所には、貝葉写本を所蔵した図書館を建造していたことが、知られている。この図書館の壁画として、建設当初、全ての結集の地が描かれたとされる。即ち、Rājagaha, Vesālī, Pāṭaliputta, 三回の結集地の Anurādhapura, Polonnaruva, Chiangmai, Bangkok であるが、今は剥落している⁽¹²⁾。

さらにモンドップの北側には寝釈迦のウィハーン、南側にはサラカンパリアン (Sala Karnparien) と呼ばれる、僧俗のための説教場や読経訓練所などの多目的ホールがあり、ここにはウィハーンのように仏像を安置し、時には厨子や寺院の必需品が置かれている。サラカンパリアンとモンドップの間には、ラマ I 世時にスリランカから持ってきた菩提樹の庭園、鐘楼、池が現存している。

サラカンパリアンは、ラマ I 世による第一級王室寺院建立の前に、既に存在していた Wat Photharam 寺院の布薩堂であったと伝えられている。それがそのまま本尊とともに残されたとされる⁽¹³⁾。また、Wat Photharam 寺院の住職プラ ポンナラート (Phra Ponnarat) 長老が、Wat Pho 寺院の住職になり、ラマ I 世から宗教的指導者として尊崇を受けたという。ラマ I 世のワスクリ (Wasukri) 王子は、12歳の時に沙弥として出家し、後に比丘となり、ラマ IV 世の時に僧王 (Saṅgharāja) になったといわれる⁽¹⁴⁾。

1.3 僧院

寺院の南側は僧院で、僧坊が並び、北側には、学校、TAMNAK WASUKRI RESIDENCE と呼ばれる図書館を含む建物が並んでいる。この Residence は前掲のラマ I 世の王子比丘、後の僧王の庫裏にあたる。そこには、礼拝堂のほか、貝葉、紙の両写本を所蔵する厨子の入る図書館がある。ここには、貴重な、動きを描いた幾種類もの動物の姿態、ラーマキエンの物語、星や天文を示す様子、ヨーガの動き、人体の動きを示す図等の壁画が描かれていて、恰も博物館のようである。

2 Wat Pho 寺院の布薩堂について

2.1 布薩堂内陣

Wat Pho 寺院は、バンコク市内の観光寺院として有名であるが、布薩堂の内陣に入ってみると、行事が行われていない時には、天井が高いので常に涼風が入って清々しい。信者達は静かに参詣し、そこで瞑想する。お堂には壁画がびっしりと描かれている。仏教に関する物語が描かれているが、これまでのアユタヤー期、トンブリー期とは異なる、新しい時代の理念を伝える意図を持って描かれているように思われる。

2.1.1 本尊仏

ラマ I 世が新たに造った布薩堂に、トンブリーのワット サラシナ (Wat Sala Si Na) 寺院の仏像をここに運ばせて、プラ プッタ テープ パティマコン

(Phra Buddha Deva Patimakorn) という名前を贈与して安置した。ラマIV世は、ラマI世の遺骨をこの仏像の台座の中に安置したと言われる⁽¹⁵⁾。

2.1.2 壁画（ラマIII世時に描き始め、ラマIV世時に完成）

2.1.2.1 四天王壁画

内陣仏像上の天井を支える横木に四天王と従者達が描かれている。東に、ガンダルバ達を従える持国天 (Dhatarat̥ṭha) 図 (写真6)⁽¹⁶⁾。



写真6 持国天図

南に、夜叉達を従える増長天 (Virūlha) 図。

西に、龍の主神たる広目天 (Virūpakka) と従者達。

北に、夜叉、羅刹を率いる多聞天 (Kuvera, Vessavaṇa) 図。

2.1.2.2 仏弟子物語壁画

ドアとドアの間、ドアと窓の間、窓と窓の間の壁には仏弟子の物語図が描かれている。26面の縦長或いは横長の壁に35人の仏弟子の生涯の重要な場面が描かれている。ここでは、最初の壁（東面北側）と最後の壁（北面東側）の物語を取り出して紹介する。

2.1.2.2.1 コンダンニャ (Kondañña) 長老の物語 Jātaka nidānakathā, Aṅguttara-nikāya Aṭṭhakathā (Manorathapūraṇī) Vo. 1, pp. 135–148⁽¹⁷⁾ より



写真7 コンダンニャ
の占相と出家の場面



写真8 太子の出城



写真9 太子剃髪、帝釈天、
御者と馬パンタカ

中央に誕生したシッダッタ太子が将来仏になると王宮で占相した若い婆羅門コンダンニャを含む婆羅門達そして左上に出家して出て行くコンダンニャ達の姿(写真7)、寝入る妃とラーフラを置いて夜半に出城しようとするシッダッタの姿(写真8)が描かれている。生まれたばかりのシッダッタの王宮での占相を受ける姿と出城の場面は、バックに赤色の基調が見られアユタヤー期後期とトンブリー期の寺院壁画とほぼ同じ型で描かれている。従いこの場面は伝統的な描写法で描かれている。シッダッタが剣で自ら剃髪する姿と帝釈天が空中から髪を受ける姿(写真9)もアユタヤー期後期とトンブリー期に描かれた伝統的な型が用いられている。

壁画の中に殊更に仏伝図が見られないが、仏弟子の場面の中に信者達がそれと見てすぐにわかる、仏の誕生の占相、出城、剃髪がさりげなく示されている点が興味深い。出家後のコンダンニャを含む五比丘と神々の前での仏の初転法輪の様子も描かれている。さらに喧騒を嫌うコンダンニャが象に慕われる様子も描かれている⁽¹⁸⁾。

2.1.2.2.2 モーガラージャ (Mogharāja) 長老の物語

これは、『スッタニパータ』『パーラーヤナヴァッタ』に関連する物語である。『スッタニパータ』の註釈書 (Paramatthajotikā II, pp. 575–607) や、『賢

愚経』「波婆離品第五十」, *Manorathapūraṇī*, Vol. I pp. 331-337に相応している⁽¹⁹⁾。

この壁画は、モーガラージャに関する物語で、縦長の画面に下から上にかけて、数場面に分けて次のように描かれている。『スッタニパータ』の註釈書に相応している点が興味深い。

① サーヴァッティ（Sāvattī, 舍衛城）のパセーナディ（Pasenadi）王に仕える婆羅門バーヴァリ（Bāvāri）が、閑静な場所での修行のため、ゴダーヴァリー（Godāvārī）河畔に出掛ける為に弟子達を連れて王に挨拶をする場面（写真10）。

② バーヴァリが、Godāvārī 河畔で別の婆羅門に金を乞われて断わると、彼に呪詛され悩んでいた。すると女神がやってきて、仏に会うようにと教える場面（写真11）。

③ バーヴァリが、モーガラージャを含む弟子16人を仏の元に赴かせる場面。

④ 仏から問答による説法を受け、彼らが仏弟子になる場面（写真12）⁽²⁰⁾。仏弟子となり、仏に従って入ろうとする仏の住居は、タイ式僧院の形で描かれている。



写真10



写真11



写真12

2.1.2.3 Jātaka 物語壁画（写真13）⁽²¹⁾

布薩堂内陣のドアと窓の上方の壁に、Mahosadhajātaka (= Mahāummaggajātaka. *Jāt.* Vol. 6, pp. 329-478.) の物語が描かれている。アユタヤ期後期、

トンブリー期建立の布薩堂には、聖典の Jātaka の最後の 10 Jātaka の物語が必ず描かれていたが、この布薩堂内には Jātaka としては、この物語のみが描かれている。主人公マホーサダの、智恵がある賢い幼児の頃の姿、賢人として王に仕えて機知を使って機械じかけを用いる話、大トンネルを掘って中の様子を敵に知らせることなく自分の王を助ける話等の数場面が描かれているだけである。智慧を重視し、西洋の機械文明に劣らぬ機械を用いて、人力を使わずドアの開閉が可能であったり、一度にいくつものドアを開閉できるような話が語られている Jātaka である。布薩堂の壁画は、ラマ三世が始めてラマ IV 世が完成したと伝えられるが、この話のみが描かれている点にこの王達の意図を慮ることができる。



写真13 Mahosadhajātaka の場面



写真14 タイの民間説話図

2.1.2.4 タイの民間説話壁画 (写真14)⁽²²⁾

布薩堂の窓やドアは内側に向かって開かれ、窓やドアを枠縁に置いて留める。窓やドアの外面と内面のパネルの模様が異なっている (2.1.3 および 2.2.2 参照)。窓の外面のパネルの下部分に黒漆塗りの下地に金色でタイの有名な民間説話 (Yai and Ta, 又は, Grandma kata Prants and Sporiuts) が描かれている⁽²³⁾。この黒漆塗りの壁画の部分は、窓外面にあるのだが、窓が閉まると外側の枠縁に隠れてしまい、見えなくなる。窓を開けた時のみ内陣の中で見る事ができる。この壁画の部分は、タイ独自の民話を描いている。

2.1.3 ドアと窓の内面のパネルの装飾

布薩堂の北東、南東、南西、北西側の金箔塗りのドアの内面には、高德な

僧や宗教者の団扇が赤色塗りで描かれている。ドアの内側の枠縁にも供花、香炉等が描かれている。

窓の内面にコー・チン・ドウアン (kaew Ching Duang) 花デザインと言われる金箔の蓮の花が黒漆の上に装飾され、その蓮の中に色々な場所の高徳な僧の称号が書かれている。

2.2 布薩堂外陣

2.2.1 布薩堂外壁の切妻下の壁画



写真15 太陽の図



写真16 空中を翔る天人達

布薩堂東側外壁の切妻下の壁画には、ライオンが引く太陽神の乗る車とその前を翔る僧と行者の図 (写真15)。馬が引く欠けゆく月の神の乗る車の周りを翔る僧、行者、夜叉、欧州人達の図が描かれている。布薩堂西側外面の切妻下の壁画には、満ちていく月の図も見られる。又、空中を翔る天人達の姿 (写真16)⁽²⁴⁾も描かれている。

2.2.2 布薩堂ドアと窓の外面のパネルの装飾

布薩堂の北東、南東、南西、北西側のドア⁽²⁵⁾の外面には、黒漆塗りに螺鈿でラーマキエンの物語が装飾されている。

窓の外面のパネルには、コー・チン・ドウアン花デザインと言われる模様の装飾が金箔で黒漆の上に描かれている。

2.2.3 布薩堂を一周する外壁を支える大理石の浮彫り (レリーフ)

布薩堂を一周するようにラーマキエンの浮彫りが見られる。

3. まとめ

ミャンマー侵攻によるアユタヤー王朝崩壊後、先ずタクシン王 (King Taksin, 1767-82) がトンブリー朝を打ち立てたが直ぐに倒れ、次にラマ I 世がチャクラー王朝を樹立した。I 世は、王宮と王宮寺院を建立した後、その南側に位置する Wat Photaram 寺院を修復して、戦争で疲弊した人々の精神を高揚し、仏教の精神を進める目的をもって、仏教を尊び、仏教精神文化を教え、広く世界には異国があること、科学、医療、機械文明、天文学、仏教の智慧を広く人々に知らしめるために碑文を残して、世界的教育文化の総合大学のような第一級の王室寺院を Wat Phrachetuphon (Wat Pho) 寺院として設立したのである⁽²⁶⁾。即ちチャクラー王朝が施主、外護者となって寺院建立したのが Wat Pho 寺院である⁽²⁷⁾。

Wat Photaram 寺院時代の布薩堂は、今、多目的ホールとして僧俗の人々が学ぶ場としてそのまま残されている。ラマ I 世は、Wat Photaram の住職をそのまま Wat Pho 寺院の住職に就け、自分の精神的な師として長く師事した。さらに国内の各地の戦さで廃寺になった寺から仏像を集め、Wat Pho 寺院のお堂や回廊に安置した。

ラマ I 世が、Wat Pho 寺院にラーマキエンの物語の螺鈿のドア、大理石レリーフ、木造彫刻等を寄進した理由は、ラーマキエンは最終的に善が悪を滅ぼす話であり、ラマ I 世はヴィシュヌ神の強さを自分の王としての力に比して考えており、主人公のラーマ王子はヴィシュヌ神が大地に降臨した姿なので、彼を王としての自分になぞらえてこの物語を自分の尊崇する仏教守護の証とした為と思われる。

布薩堂の壁画は、ラマ III 世が製作を開始してラマ IV 世が完成したと言われる。それまでの伝統的な布薩堂の壁画は、仏伝図、500 Jātaka の最後の 10 Jātaka のそれぞれの場面が型のごとくに描かれた。中央には天界説法図があり、本尊に対面して降魔成道図が描かれるのが殆どであったが、Wat Pho 寺院の布薩堂では、26 の壁に、比丘の仏弟子 35 人程の話がパーリ聖典の注釈

書をもとにして描かれている。具体的な人生が壁画に表現され、人間世界のありのままの様子が描かれる。例えばお産の場面、覗き見をする女、山の中の虎が隠れて歩み寄るシーン、川の中で裸になって遊んでいる子供達、ふくよかな乳房を出して川で沐浴する女性達、馬に乗ってホッケー遊びに興ずる王子達の様子、町の中に立って話しをする西洋人の姿、橋の上にいる中国人達の姿が散見される。こういう日常の姿のあるがままの様相は、これまでの寺院壁画には余りみられないものである。人々の自然な生活の中に、仏弟子達がどのようにして仏の教えに入っていくかを僧俗の人々に示そうとしているように見える。以前より風景は暗い。

この布薩堂には仏伝図は描かれていないが、例えばコンダンニヤの物語の中でシッダッタの誕生の直後の占相の場面の赤色を使った王宮の様子や、寝ている妃と子供を置いて出城する場面、剃髪の場面の剣を使う姿では、いずれも後期アユタヤー時代にもトンブリー時代にも伝統的に使用されている手法と型が用いられている。これらの場面を見れば、何を描いているのが誰にでもわかるようになっていく。Wat Pho の布薩堂には、仏伝図はないが、仏弟子の物語の場面の中に仏伝の場面が散見されているといえる。

またウィハーン・ティの四堂には、降魔像、施無畏立像、ムチャリンド龍下の仏像、初転法輪仏像、飲み物と蜜を奉ずる象と猿を従える仏像が祭られていて、ここを参詣すると、仏の事蹟を礼拝する形式になっていることがわかる。ここでも生きた形で仏伝が示されているように思われる。

さらに、仏の過去世の物語である Jātaka 図は、只マホーサダ物語を伝える Unmaggajātaka の一話が描かれているだけである。ここにも世俗の世界の様子が多く描かれている。とんちのある子供マホーサダが、長じては、智慧を駆使して王を助ける賢人として活躍する。トンネルを掘り、自動ドアのような文明的な機械を作る様子を描き、現代にも通じるような jātaka 物語が描かれている。西洋のすぐれた機械文明を賛美する考えを示しているのではないかと思われる。西洋文明を学ばなければならない事、知恵を使って物事を運ぶことの大切さを伝えようとしていると思われる⁽²⁸⁾。

布薩堂付近の壁には、人体図も描かれていて医療を学ぶべき事を示唆している。

僧房の敷地内の TAMNAK WASUKRI RESIDENCE の図書館には、仏教に関する工芸品、美術品が所蔵されているばかりでなく、壁画には天文を示す星座、体の動きを自由に動かす動物達の姿が沢山描かれている。またヨーガのポーズで体の線を示す行者達の動き、占相図を描く紙写本も所蔵されていて、Wat Pho 寺院に所蔵されてきた文化の深さを感じ取る事ができる⁽²⁹⁾。

註

- (1) ワット・ポー寺院の正式名称は、ワット・プラチエートウボンウィモンマンカララーム=ラーチャウォーラマハーヴィハーン (Pāli: Wat Phrachetuphon vimalamāṅgalārāmarājavaramahāvihāra, Wat Phra Chetuphon Vimolmangkhalarām) である。
- (2) [清水洋平2016], [川口洋史2016] 参照。この寺院は、ラマV世時に大谷大学所蔵タイ写本を大谷大学に齎した織田得能氏の出家寺院で、当時はタムユット派寺院であった。ラマVII世時に廃寺とされたが、ラマIX世時に現在の住職がマハーニカイ派寺院として復活させたという。織田得能氏出家当時、ワット・ピチャイヤ寺院の隣は、ラマIII世時代にこの寺院の建立施者チャオプラヤー・ピチャイヤブンナーク氏の孫の文部大臣パーサ・コーラウォンブンナーク氏の邸宅であったという。
- (3) [Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 2005: 394-395] の写真を利用し、著者がそれに番号を付し、建築物の名称を書き入れた。
- (4) バイシーマーとは、浄化された地であることを示す界標で、真の結界石は、ルーカニミッタと呼ばれる自然石が、大地の中に深く埋められ、その上の地表に置かれた標識がバイシーマーである。タイでは、バイセマーと呼ばれる。地表上のバイシーマーは8個置かれるが、布薩堂の真ん中の地中にも最初に置かれるので、ルーカニミッタは9個である。布薩堂写真は [Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2018: 75] からの引用。バイシーマーは、小尖塔の中に入っている。写真は [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 23] から引用。
- (5) [No Na Paknam 1994: 194 & 199] 参照。タイのシーマーの規則については、[Kieffer-Pülz, 1997: 141-153] 及び [Somdet Phra Maha Samana Chao Krom Phraya Vajirañānavararasa 1983] 参照。
- (6) 写真4, 5は、清水洋平氏より提供された。

- (7) Cf. [Matics, K. I. 1992], [No Na Paknam. 1994: 118–125]. ラマ I 世時の壁画については [Young, Patricia M. 2019: 1–24] 参照。
- (8) ロップリスタイルの説明については, [Beck, Steve Van. 1999: 85–86] 参照。
- (9) ウィハーン・コートウ内のジャータカ図については, Cf. [Matics, K. I. 1992], [No Na Paknam. 1994: 118–125]. ラマ I 世時の壁画については [Young, Patricia M. 2019: 1–24] 参照。
- (10) ワットポー寺院へのラマ I 世のラーマキエンの作品寄進については, [Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2018: 23–25] 参照。
- (11) Srisanphetch 仏のマハーチェーディについては, [Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2018: 34–37] 参照。
- (12) モンドップについて [No Na Paknam. 1994: 196] 参照。結集の地の壁画については, [Matics K. I. 1992: 47–50] 参照。
- (13) Sala Kan Parian (preaching hall) について [No Na Paknam. 1994: 195]。
- (14) [Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2016: 72–74 & 152–154] 参照。ここには, ワット・ポーの初代住職は, トンブリー王朝のタクシン王の前で, 跪けと命令されても決して跪かなかったので, タクシン王から背中を強く叩かれたとある。ラマ I 世は, 彼を尊崇したと伝えている。
- (15) [No Na Paknam. 1994: 194–195]. ウポーサタ堂の本尊については, [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 3]. ウポーサタ堂の壁画の解説についても, この本によるところが多い。
- (16) 写真 6 は, [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 210] 引用。
- (17) Jātaka nidānakathā は PTS. Jāt. Vol. I, p. 56–57.
- (18) 写真 7, 8 は, [No Na Paknam 1994: 12, 14] から引用。写真 9 は, [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 68] から引用。コンダンニヤが象に慕われる事は, Sāratthapakāsinī に詳しいとされるが筆者未見。又, その図については, [Matics K. I. 1992: 28] 参照。
- (19) Sn. 976–1149, Pj. II. pp. 575–607, 『賢愚経』巻 12 (大正 4. pp. 432–433) 参照。
- (20) 写真 10, 11, 12 は, [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 190–193] 引用。
- (21) 写真 13 は [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 206–207] 引用。
- (22) 写真 14 は清水洋平氏から提供頂いた。
- (23) 物語の内容は, このようなものである。「お爺さんとお婆さんが豆とごまの種を植えて孫達と山に住んでいた。孫の男児が, 見守りを頼まれたのにもかかわらず, 不注意でいると, カラスが七つの豆とごまの種を盗んだ。孫は, 鞭で打たれた後, 次々と色々なものに行動を起こさせてカラスに盗んだものを返させるようにしむ

- けようとした。孫は、蠅を象の耳のところに飛ばせた。すると象は大地を踏みつけて洪水を起こした。洪水は、犬をたたく為のハンマーを作るのに必要な火を消してしまった。すると、犬は猫を噛んだ。猫は、鼠をおびやかした。鼠は、カラスを射ようとしていた猟師の弓の糸をかじった。その結果カラスは、全ての種と豆を返すようにしむけられた。」[Matics K. I. 1992: 31–32] 及び [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 62–63] 参照。
- (24) 写真15 は、清水氏から提供頂いた。写真16は、[Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 42–43] 引用。
- (25) 布薩堂ドアについては [Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999: 42–43 及び 45] 参照。
- (26) UNESCO は、Wat Pho 寺院の大大理石の碑銘文を2011年7月に世界の記憶に登録。[Phrarajapariyattimuni 2018: 69] 参照。
- (27) [Wyatt, David K. 2004: 5–10]
- (28) [石井米雄著、解説飯島明子2015: 12–18] 参照。
- (29) TAMNAK WASUKRI RESIDENCE の図書館の中については、[Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2016: 46–53, 158–238 & 359–383] 参照。

引用文献

- 石井米雄著、解説飯島明子『もうひとつの「王様と私」』めこん、2015、pp. 12–18.
- 川口洋史 2016 「ラタナコーシン朝前期における大臣の変遷—官職を手がかりとして—」『名古屋大学文学部研究論集』(62), pp. 5–58.
- 清水洋平 2016 「大谷大学所蔵タイ王室寄贈貝葉写本の来歴再考」『パーリ学仏教文化学』第30号、pp. 56–57.
- Beck, Steve Van. 1999. *The Arts of Thailand*, Periplus editions (HK) LTD.
- Bunchob M. & Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 1999. *The Ubosot at Wat Pho*, Wat Phrachetuphon Vimolmangkhalaram.
- Kieffer-Pütz, P. 1997, “Rules for the in the Vinaya and its commentaries and their application in Thailand”, *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 20, 2. pp. 141–153.
- Matics K. I. 1992, *Introduction To The Thai Mural*, White Lotus, Bangkok, pp. 32–43.
- No Na Paknam, 1994. *Mural Paintings of Thailand Series*, Wat Phrachetuphon, Muang Boran.
- Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2016. *TAMNAK WASUKRI RESIDENCE of WAT PHO*, Amarin Printing & Publishing.
- Phrarajawetee (Suraphon Ch.) 2018. ‘Ramakian’ on the Cloister Walls of the Srisanphetcha-

- dayan Stupa', *The Ramakian at Wat Pho*, The Sangha of Wat Phra Chetuphon Wimon Mangkhalaram.
- Phrarajapariyattimuni, 2018. *The Photobook of the Exhibition of the 230th Anniversary of Wat Phra Chetuphon: The Memory of The World*, Sirivadhanabhakdi Foundation.
- Phra Sriwisutthiwong (Suraphon Ch.) 2005. *The Chinese Stone Figurines of Wat Pho*, Fellow monks of Wat Pho.
- Somdet Phra Maha Samana Chao Krom Phraya Vajirañanavarorasa 1983. *Chapter XXIV Sima (Boundary), The Entrance to The Vinaya*, Mahamakut rajavidyalaya Press, Bangkok.
- Wyatt, David K. 2003. *Thailand, A Short-History Second Edition*, Silkworm Books.
- Wyatt, David K. 2004. *Reading Thai Murals*, Silkworm Books.
- Young, Patricia M. 2019. The Lacquer Pavilion in the Pavilion in the First Reign Context, *Journal of the Siam Society*, Vol. 107, Part, pp. 1–2.

謝辞

本調査は、パーリ学仏教文化学会、2018年度海外研究調査報告奨学金によって可能となりました。記して御礼申し上げます。